



夙
俗
文
集

著
之
友
志

卷
之
三



自隨落生無思慮の逆稿凡俗文集

首の及古老の二目錄

飲食四季の文

函霊の記

摺針摺小本の辯

市中の舞

生解の記

好悪の辯

漢歸去来の辯

安方の頌

送猫児の書

七首の論

百鬼行

療病の論

撰りの舞

夏腐の賦

目録

自序 膳人の記

吉原の賦

飲食の四季の文 并序

人生にて乳味に百日のを嘗^か神^かと^は朝夕の部^は度^は育^はの夜^は食^は
 遠^は子^は者^は六^は帝^は飯^はを^は山^は花^はむ^はむ^はあ^はる^は余^はの^は食^はの^はあ^はと^は食^は
 綴^はて^は一^は日^はも^は生^はに^は食^はの^はこ^はも^は時^はに^は忽^は黄^は泉^はの^は家^はの^は黄^は泉^は
 の^は客^はす^はる^はを^は食^はを^は味^はに^は見^は入^はる^は鳥^は鞆^はの^は山^はに^は求^は食^は十^は
 王^はの^は勸^はを^はも^は食^はを^は為^はた^はと^は仙^は人^はと^は成^はる^はた^は松^は子^は茯苓^は丹^は菜^は
 の^は電^はを^はと^は神^は儒^は仏^は落^はる^は不^はの^は客^は物^は之^は象^はと^はい^はふ^は子^は油^はと^は
 月^は夜^はの^は中^はの^は夜^は日^はの^はあ^はく^はの^は悦^は七^は夜^は髪^は並^は帯^は解^は
 袴^は足^は元^は服^はを^は進^は入^は舞^は取^は浴^は飯^はの^はや^はり^は料^は理^はを^は元^は
 と^は又^は人^は死^はし^は七^は回^はの^は遊^は若^は百^は日^は一^は周^は忌^は三^は年^は七^は年^はの^は

法り子しももおちぎぎもも来てて親の法り一一夜夜別別時時のの茶茶
ふふ夏夏腐腐のの川川煮煮有有入入れれ伝伝事事ののおお奇奇同同座座のの種種よよめめるる
ままててハハ秋秋非非時時のの調調菜菜油油揚揚のの白白にに落落りり及及置置枕枕もも料料
理理のの位位をを以以妓妓女女のの白白をを評評じじああなな妓妓のの面面白白きき無無齒齒
がが出出るる立立奔奔祀祀のの名名れれるる酒酒樽樽ををううつつぐぐむむままききをを常常にに
食食不不是是をを専専人人といいひひままりりままささをを不不以以味味不不是是をを早早焼焼といいふふ
品品吹吹あありりののおおももひひ今今もも言言わわれれたたははままれれてていいかかりり
何何のの表表のの朝朝雜雜煮煮をを始始りりおおししのの食食物物等等はは我我れれもも
又又ののじじ七七種種のの粥粥もも和和しし餅餅をを入入れれううああづづままのの白白めめでで煮煮ててまま
ここのの表表をを取取しし十十日日のの赤赤小小豆豆粥粥ももこことと煮煮りりをを一一年年をを梅梅のの敷敷

ががちちにに白白ままごご油油りり未未兵兵紅紅ののああかかままののここのの目目ののははじじかかちち又又紅紅
白白魚魚にに海海苔苔ののいいんんどどああるるんんどどいいししよよああががままたたんんややハハ記記にに抄抄
宜宜くく初初朝朝飯飯蛸蛸蟹蟹規規田田螺螺ううとと古古茶茶ももびびちちささここのの茶茶等等はは
おおれれ時時にに陸陸ててううままををすすくくををかかげげてて生生とと梅梅枕枕ののああららひひ成成雜雜
のの池池ををここのの艾艾餅餅ののききつつきき糖糖のの名名ををいいてて日日上上膳膳のの息息のの
ままききををああららりり陽陽ををやや燃燃流流りりててよりより標標朝朝ハハ汝汝者者ののいいままよよくく
ああららのの煮煮物物ににいいししののおおれれにに三三月月ののああららももままたたいいままにに咲咲れれ社社
ままつつぬぬをを残残遺遺後後ののききりりああららりりここのの小小頃頃海海邊邊理理理理とと味味線線
或或ははああららののいいららりりににいいままるるああららのの蓋蓋ももああららりり物物等等ももああららりり
隠隠居居ししままががたたりりハハ齒齒ののままをを捕捕ららぬぬ世世をを恨恨みみ

婚前の小娘ハ切飯ハ口紅の元坊と死リむらに妻の奥之結の妻
めいめ和布の足味物起うまの切らえ三月の暮も小かく卯月と
あり卯の切垣小嘆て新茶の餅くたしく時を走と各尔松魚ハ切
し那小貴「筍ハ羨いけり」蒸ハ汁ふせじ蕪ハ餅ハ巻ん
花袖ハ餅ハ交る粽もかきて栢餅と梅り其もまじり新麦ハおて
どうけをすせ果松茸の海り若由じ、蕪花の元物白瓜ハ
まて名をあげお子ハ鴨焼に巻有車屋の心太ハ白雨宿の席夕
河原小舞敷をさの束食あり栢畧の縁がさの首水乃の考の力
を斬て之依の屋飯ハ茶冷を如小梅ハ茶穂小深ハ丸蕪瓜井戸
おさか新秋ハもまじり七夜ハおけぬい日素麩の定日ハハ七

度喰て七夜水と流るとある完束をれと食ハのぐほし金といハ甚方
飯干ハ結生尼果の祝ハ起りて之迄暮秋もすに月見といハ喰
り重歩を履ひ雨多ありお子ハ月の如くなく芋代のもうまじり秋の
葉の巻起りくお下の色をばていつハ彼もけやぬんと表れも
滑されうハ比轉といハ物ハ世もへうまがられた儂のむらじまは
心重れ懸といハ物も又まき物ハ箱といハ物ハ脂もつて志つて
か安く下おの人の足ハ入安くお毎におせられたらといハ物あり
お月おこして平湯といハ又飲管おし兼酒ハ酔てハつてを走
栗海飯ハ飽てハ飯をあげ十之夜ハ蕪と栗といハ名を呼れ芋ハ
長うをいハ新秋ハ柿もぬぬけ栢相も赤く亥の子ハ新餅も飯

ひくは月廿の高あま、夷藩とて飯と志の子中まといおむね
いへき山をじく物まけの朝葉の夜いづれもま
おの幼書のまきまき大根のありまきいまぎれ
大湯を腐す増のり物も時とくましく暮れ又はなれり
買束のいさじよあて煉掃餅つき節令と密に年忘れ
の大あせおんがいの仕納め大まに飲ま大まに喰大喰まで
喰つてさしりく年ハ暮れり

安方の頃

それ人のつらる氣管喫き首、愚ある有愚とハ抱石か
そ承教くこ或ハ鈍といひ破家といひ戲氣を令れ勝ぬけと
又是ぬもいぬつり度るがうあやうたみ先鈍といハ剛がき

の字物のまぬの右破家といハ愚の家を破り失れたる戲氣ハ
小兎のたむれをわがし勝ぬけハ勝の内積けてそ別れたる成
し是ぬといハ智恵のまきぬりなりハ偶然なるといハ度るがう
とハ并乱忘の字まきまきあつりもみぬれ尋々の子毎乱の二
字下略しく度るがうといハ安方の字ハ東西南北の方向を
知れ共安りなりハ別方を安に抑は安方福喜の地は人
味すれれ知れぬ憤るいづれもまきまきあつりもみぬれ尋々の子毎乱の二
もは今日を道てゆきの若りかきを道るかく今新し
まは公なる探齋と填給よ如く云ふいひきりして不礼

有る人もいふ由し生るるも生て死ぬ時死ぬ天をうらむ人
まじらぬは来世の直人足るじ不生不滅の浄土に身を置く
の善方有る果又神由が覺るるもいふ方又いふ大福長者
波ねが富ままけり智る者、智に例され善者志は善者倒
る世の滄いなる果報といひて業をたて天をうらむ飢死ぬる
色を来江に尔ををるる方なる三人といひて飯田町の松長堀町
の七を弟芝の精を来足るを後秀へり世の中の人賢者格別
尋常の人ぬり破あ氣氣度なり腐ぬけのたづねなり
づの材料いふとも上京上生の安方の位にありぬるなり
学文理科のせんとして三細五常の法を利害場失害に
いふ

いふ勝もいふ流中ゆきをさる人さるあうらうにおきては人を相じ
香候のたまけりさる人のあゆみゆきも用世のあゆみゆき
破あ者ゆきいふあま物なり、天下の合言也

舟幽冥の夜

脚月のは白梅の香を吹送る風のそよよあけくうぬれおて水
のゆきやとけいふあすりやをいふをいふ河で竹下を渡す
肉にまあるる切の年の徳二八年に足る粉白く城録
すや来史をいふ大御いふるをいふをいふをいふ



小石も同じ如き事又のさうねめくまにまう皆くけよまれぬ
 女障り今しりさつ坊人々すもてりやう毎に紫梅うぬ
 梅さる露のわらもあまそけやをるれ沖の香いあをわすれ
 けしやうすれはまへに澄くぬ又向より紫梅の人のわら沖に
 紫の如くけすもりのねあふてあまの時に浪もゆれてあを
 せびびの比まらちへ漕りてあまのけと成ふ是を回へ
 まる西絶が杞素野りもあらわへ五湖の朝見は東屋の君
 の橋の小舟が湯に棹はせぬ又江口の君あまの天穂の
 せぬ霜津深川とくあまのさうて夜あかかくの如く
 梅見を送るの書

250の二

此は... 柳子... 必... 矢... 終... 解... 似...
... 柳子... 必... 矢... 終... 解... 似...
... 柳子... 必... 矢... 終... 解... 似...
... 柳子... 必... 矢... 終... 解... 似...
... 柳子... 必... 矢... 終... 解... 似...
... 柳子... 必... 矢... 終... 解... 似...
... 柳子... 必... 矢... 終... 解... 似...
... 柳子... 必... 矢... 終... 解... 似...
... 柳子... 必... 矢... 終... 解... 似...
... 柳子... 必... 矢... 終... 解... 似...

言の如... 必... 柳... 矢... 終... 解... 似...
... 言の如... 必... 柳... 矢... 終... 解... 似...
... 言の如... 必... 柳... 矢... 終... 解... 似...
... 言の如... 必... 柳... 矢... 終... 解... 似...
... 言の如... 必... 柳... 矢... 終... 解... 似...
... 言の如... 必... 柳... 矢... 終... 解... 似...
... 言の如... 必... 柳... 矢... 終... 解... 似...
... 言の如... 必... 柳... 矢... 終... 解... 似...
... 言の如... 必... 柳... 矢... 終... 解... 似...
... 言の如... 必... 柳... 矢... 終... 解... 似...

者の二

一又此の事や、思ふが所の首を、身及び福は、されど
ある是迄の物に、魚因を、いへる、是より、節の人の、堂、思ひ、
一、必、是、と、して、高、く、し、り、し、の、を、毒、の、こ、の、災、

摺鉢、摺鉢、小本の、辯

摺鉢、ハ、浦、前、の、古、き、家、上、り、の、口、に、き、居、す、海、の、肌、に、坐、す、
小、刻、の、首、の、し、り、し、の、人、を、望、み、し、山、の、似、う、富士、山、に、似、う、
富士、山、の、似、う、の、海、の、上、の、似、を、望、み、し、海、の、上、に、坐、す、
が、天、地、と、形、を、似、う、す、る、物、。、と、思、ふ、は、子、物、を、摺、鉢、の、
思、ふ、も、こ、の、似、摺、鉢、の、も、こ、の、能、く、摺、鉢、の、似、う、る、物、有、り、
此、摺、鉢、の、も、こ、の、上、を、望、み、し、飛、先、有、り、か、く、せ、く、大、い、

松茸に、お、せ、り、是、の、似、の、摺、鉢、を、お、せ、り、
め、の、天、地、の、似、を、し、り、し、の、似、の、
く、し、り、し、の、地、を、望、み、し、雷、の、似、を、望、み、し、
陰、陽、お、せ、り、し、の、も、こ、の、似、の、
河、の、水、火、お、せ、り、し、の、も、こ、の、似、の、
鉢、の、も、こ、の、似、の、又、摺、鉢、の、も、こ、の、似、の、
と、思、ふ、も、こ、の、似、の、摺、鉢、の、も、こ、の、似、の、
こ、の、似、の、調、の、君、臣、父、子、を、望、み、し、
ま、く、の、調、の、君、臣、父、子、を、望、み、し、
摺、鉢、の、似、の、君、臣、父、子、を、望、み、し、

凡物其時をて化する有腐る情あり當と化人馬の仕舞を志
塔不化る茅虫ハ蝶不化田鼠ハ鶉と化楠ハ木に化存海底不化
蛤と化山の羊ハ體に化鹿ハ化けて鹿とある古足袋古袴ハ茶
とある市井に化る一うま

百鬼行

鏡餅に化ちめるの影ハ今目の系鬘に化當年の災共ハ草の
湯に化娘ハ姑と化むす子ハ親に化馬性ハ家醫者に化錦入
骨不化給と化下駄賣の雲霧賣と化ハ天氣ハ守之胡の煙賣
夕ハゆ賣と化ハ言賣妓の没者ハ女と化ハ鹿と化ハ海と化ハ智者
と化馬と化賣と化ハ是ハ常ハ人の居る化物オテ人ハ不化者もセバ
又大樹の精ハ化石地蔵も化ると天地のつれ化けキレヤ狐狸
赤猫ハ狸の毒の類をよく化るものよキあるもの成ハ男女と化
ハ一也
水鏡と化小僧と化ハおと化ハ京を化ハ対テ人オテ化け能
人の魂とくハとハ極上の化ハ古舟の大入道ハ紙入道と陸舟
の隈と見えろハ人として化れむとハ世の中の害者也



あつくりば共共悔の愛の化る能く人をあげ能人を捨て世
の中の害は化者よりとてろしとてろし

生酔の泣

或人俳諧のまことに生酔といふをて
我判者にはとて求判者
かきて本のは生酔いづ生酔い
は生酔い
あつくり判者の末練ゆし
死物も活物に火をほらけ
今生酔の四よを分けむ
生酔あるは老なるも
あつくり小唄うてむ

然し春の息も猶も無きものなりけり春の生輝は面白きものなり又暑も候
ぐく御をどし教へたるやうの事ありとまて冷水賣也いと暑
と流るる形も赤れ目すら汗に掛りしむしとらひの事
の見る目もいづれも又秋の生輝は赤れも滑るる
秋の下流も赤れもいづれの上流も赤れも又秋の生輝は赤れも滑るる
さぞめでたき事なりとてさしまた又秋の生輝は赤れも滑るる
るうづれも赤れも生輝ありとらひの生輝は赤れも滑るる
河の水も赤れも生輝ありとらひの生輝は赤れも滑るる
川の水も赤れも生輝ありとらひの生輝は赤れも滑るる
物の情を知りて御借見來はし今も生輝は赤れも滑るる

付けたる春の息も猶も無きものなりけり春の生輝は面白きものなり又暑も候
くもし秋の生輝は赤れも滑るる
ありとらひ

療病の論

山植既に官を辞して去るは小治の事なり
と流るる情にありては牛の目も赤れも滑るる
むとらひ病大が曰吾子足らざる人ぞ植は白濁を好む事なり
病の事も赤れも滑るる
山植如字の植は白濁を好む事なり

由痛くして辭し去る病大が曰昔司馬相如筆を楊に記めて
ては浮細るいふらうれ去るも病ありき去るといふ大文吏
志ととらふりかめ今吾子司馬と名を同じして何
かの黄金國をいづれの本に留まりてすすも也長門を帝
の是るは雷又隋氏の奉重に對せし及び名もの南司馬
と同じして身僅に二千の下の指食の魚かおのぼりて
身病ありし自ら醫を好め去るも自らの病を治するを得て
他の病を療せんといふかうけざる如く實の世に陰陽師の
知べし吾子かくの如くか人の時と人を知らば人と人を
知ざらぬとをいふは是を氣氣といふと相う曰汝が言

むと去られれ又病醫をすべし怔忡倚息加るに服疾を以
むるは病を治するよりほるといふ病体が大を療し得
るまれ身病の病は治して治して心神の病は去りて怔忡
眼疾の如き身病の病は名利は官は心神の病は今是を治して
病の自然なる也醫を脱て是を八蓋にやゆまは心を無何有
りて道途せば自ら身病の病は治してといふ病大自はく吾子實
に自ら心神の病を療し得るは貴物病ありし吾子の業と交
りてといふ病は去るは去るを病を造化のさるれ病則
いふありといふは身を投じぬ

好悪の辨



日向時 ひなたとき 花 はな び び の の 雲 雲 有 有 空 空 を を 見 見 て て 夢 夢 中 中 に に け け り り を を 見 見 る る 目 目
天 天 を を 見 見 し し 二 二 の の ち ち め め の の 念 念 を を ま ま じ じ り り 物 物 を を 割 割 し し る る 用 用 を を
か か の の 八 八 の の 是 是 た た ち ち の の 心 心 を を ち ち め め て て そ そ の の 子 子 横 横 を を ち ち め め て て 糸 糸 を を ち ち め め て て 目 目 を を 上 上 の の 横 横
是 是 れ れ の の 虫 虫 を を 喜 喜 ぶ ぶ 者 者 曰 曰 け け 名 名 を を 解 解 と と け け 虫 虫 や や 目 目 を を 上 上 の の 横 横
か か の の 世 世 の の 事 事 を を 増 増 ち ち け け り り 世 世 の の 中 中 の の 上 上 の の 目 目 が が け け
横 横 を を ち ち め め て て 苦 苦 みの の 子 子 の の 心 心 を を ち ち め め て て 是 是 別 別 是 是 の の 事 事 が が 白 白
ゆ ゆ じ じ の の 心 心 を を ち ち め め て て 虫 虫 や や 目 目 を を 上 上 の の 横 横 を を ち ち め め て て 是 是 た た ち ち の の 分 分 り
て て も も 全 全 身 身 平 平 く く 是 是 の の づ づ け け 又 又 横 横 を を ち ち め め て て 横 横 を を ち ち め め て て 目 目 を を 上 上 の の 横 横
け け 虫 虫 の の 心 心 を を ち ち め め て て 虫 虫 や や 目 目 を を 上 上 の の 横 横 を を ち ち め め て て 是 是 た た ち ち の の 分 分 り
い い 虫 虫 の の 横 横 を を ち ち め め て て 別 別 是 是 の の づ づ け け 横 横 を を ち ち め め て て 是 是 た た ち ち の の 分 分 り

あつたふにけり付は是を横おりとてしよの目めつてはま
こわい甘んとすうもひさるもを世のまぢらぬ性まぢ
てけいふる氣深達りて性さばり人さの縁高師は
あつたふにまぢりて性か多る人さ米搗出すくひまぢて是
さあす付はまぢのあつたふのさつてつて世を信りぬ
けりまぢてまてい命をぢらけいさつてつてつてつてつて
る如と能ぢりし男と命するのまぢのあつたふのあつたふ
銀の銀とあつたふの飯粒の古を以て使えり用をまぢりぬ
漢海去来の辞一
天明く五斗の米のつるまぢ故伊海り天倉を米抄り

天明の元米合抄成して今更の田地有りて食ふはる僅僕妻子
さあひ酒も樽も満ちりやせぢりやバけりは官さつたふの土
酒のりまぢり志有る官を捨て食ふはる田地もかくはる
能ぢりしやまぢり世後り戦氣の身をさつてつてつてつて
けりうらまよとせよとて宰相うらとてつてつてつてつて
今更のりけり切切の門のあつたふの法及罪のあつたふの因
能ぢりしやまぢりさつたふのあつたふのあつたふのあつたふ
あつたふのあつたふのあつたふのあつたふのあつたふのあつたふ
酒のりまぢり酒のり酒のり酒のり酒のり酒のり酒のり酒のり
酒のりまぢり酒のり酒のり酒のり酒のり酒のり酒のり酒のり

其地有て口をささく物あくられ

豆腐の賦

豆の豆腐とて物あり味滑して流くも切やまき花の葉
 に碎を滑してハ滑豆腐に志く物あくらハ三伏の暑一室の
 冷酒奴豆腐小暑を志す秋の月也紅糸とく母小めを添々の
 香は湯豆腐の香を流ぐ又菜飯の夕の田楽の風味ある茶
 の葉はつてせいのうまき有或ハ古人の歌かてハ秋の乃乃秋
 とくと呼ばれて定家坊の小倉山谷と称し鎌倉の之府田楽の
 好者とすそり香線河ぬ角大孔のハ人ハ八陣を信て八雲
 くの飯向はぬ理の石も豆腐連との有るぞあ平振

此其紙をささく物あくられ
 流ぐも物揚豆腐小暑を志す
 秋の月也紅糸とく母小めを添々の
 香は湯豆腐の香を流ぐ又菜飯の夕の田楽の風味ある茶
 の葉はつてせいのうまき有或ハ古人の歌かてハ秋の乃乃秋
 とくと呼ばれて定家坊の小倉山谷と称し鎌倉の之府田楽の
 好者とすそり香線河ぬ角大孔のハ人ハ八陣を信て八雲
 くの飯向はぬ理の石も豆腐連との有るぞあ平振

自平麻人との宛

夫れ陰陽命あり物あ対す有り天地対上と云下
 谷つり日月小対し年ま辰有若く愚の對山まれ川有海と
 君れハ隆と野く小大対し角ま丸有老と少と云男ハ女ハ
 對し虫あれ曲有り客あれめく生れハ死貴者ハ愚者有

表はす乃れ表を以て神は仙も對し木は葉の對は合は石も並び
玉は珠も對しはさる對は腹有れ背有目は身も對し口は
鼻の對は只脚の對する物は去るのさかた一男もさるる眼
耳鼻舌唇手足之毛爪も心の奴りて此も安き事な
て中も飛んで羽有るがしを相合し心も相合し
之能なきがゆの自安し彼れは用を求めし
ある耳もそれさるもの物の業を働し能を求めし
そのも依然として一男の内もなまがし心も
働きたれ静之靜あれ安し安らば病あり
只也のゆはさるものさるる悔のり者對味んと欲れ

油が居所の言へし遠く布はたかざらるの刑とまぬる足はる地
有るやつある報ありや夢の對するものありも
自は名を脚へし言へし言へし言へし言へし言へし
そのえ近半の言へし言へし言へし言へし言へし

吉原の賦

まれ吉原の軍は武は合城の良は有る客の格は
や谷を各するの園に地を以てめぐるは由有る
場も隣りて吉原の山も手は後場をくま
西は義倫合秋は並で日障つるは中も
出へ茶は大門蕩くして水も向ひ衣紋は

たきり同中堤長とじて出の千俵小頼り流の清茶を更て
親善堂の骨より麻の肉縦横不乃を穿て大慶形を舞
し置のゆら橋を糸物と云仙の業朝目と云つれも冥族む
り〜〜つ〜ある家言傳を以し鏡の百種を以し是は星は
格女を坐不し格女を称し廿多と云廿多の位階有て家小又
亦有揚屋有茶屋有太史物子揚屋小格比事し廿多ハ
茶屋小格太史物子の中廿多茶の思せつし紅白の旗紙
辨中〜立を〜する百種ハ半残老矣立置目と細し
此と流の〜家小〜向の〜廿多ハ〜所為有て錯攝を
其の金〜廊下有れ〜度〜方座有牌斜小器揚

を桐鐺の湯氣之下ある格を此の及格と持する雷廷
て勿〜格〜八家の鳴り止之客に流小有家小有廿多ありま
系所小就有る有足を個〜足と云多〜或〜圍基双六の茶〜
骨牌茶の湯餅造り連る有客と云廿多ハ〜
上りの三味ハ格と称して〜格廿多の形ハ後清を批て見る
客の上戸有下戸有廿多又志〜り盃入形していさよが如
物如〜青〜も〜飲人をもげし事〜又傳と云
て一産無不入上戸の府殿ハ強〜下戸の府殿ハ弱〜如
今の妾ハ志〜り列傳の不〜妾や〜之無園ハ〜深〜入
吳那の鏡蜀ハ錦茵〜言〜して次は也〜類〜し志め

多る好談し愛を起すも有れ恨の極を云義かりて後く床も
 有或は何のゆくハ云家おをまげまし喧嘩有る有浪子の侍候を
 告より後く又の逢解を物し別れの酒不焼味等々味
 茶屋船宿のぼかりておまを去れり其事を知れり
 之事を耳むずり付ハ新不味まぬあや亡んそ業を知りて
 業ハ遊少付ハ林を教へ心と補ふ生を隠し生を考ふの
 他境まをいし里

昔の及古二の巻終

東都書林

芝神明前三嶋町
和泉屋吉兵衛

